

「経済学部創立100周年」盛大に

ノーベル賞経済学者、マンデル教授が記念講演

10月22日、経済学部創立100周年記念企画として、1999年ノーベル経済学賞受賞者、ロバート・A・マンデル教授（コロンビア大学教授）の講演会が開かれた。

会場の多摩キャンパス8301教室はほぼ満席。午後1時、教授が教室に入り、拍手で迎えた。マンデル教授は、32年



の父」とも呼ばれている。これら国際経済学、貨幣経済学などの分野における先駆的業績によって、99年にノーベル経済学賞を受賞

カナダ生まれ。マサチューセッツ工科大学（MIT）およびロンドン・スクール・オブ・エコノミクスを卒業。56年MITで博士号を取得。経済学では必ず学ぶ「マンデル・フレミング・モデル」理論の生みの親。また、「最適通貨圏の理論」によって、複数の国が共通通貨を保有することが適切なケースとありうることを失業問題との関連で証明し、「ユーロ

した。国連や世界銀行、アメリカ財務省、欧州委員会など多くの機関およびカナダ、南米そしてヨーロッパ諸国の政府のアドバイザーをつとめ、現在は人民元に関して中国政府のアドバイザーもつとめている。

学生本因坊戦に初出場で初優勝 村上深さん（経済1年）いきなりの栄冠

8月3―5日に神奈川県箱根レイクホテルで行われた第49回日本学生本因坊戦（主催・毎日新聞社、全日本学生囲碁連盟）で、経済学部1年、村上深さんが初出場でいきなり初優勝を果たした。中大からの同大会

格な雰囲気があったが、名誉博士学位贈呈式で、贈られたばかりの日本語の学位記をこちらに見せようとして上下逆さに持ってしまったりと、巧まざるユーモアと愛嬌のある仕草に会場がわいた。

と語った。講演会のあと、多摩キャンパスから会場を赤坂プリンスホテルに移し、経済学部創立100周年の記念パーティーが開かれた。財界、政界からも要人多数が顔をみせ、広い会場が「スシ詰め状態」となるほどの盛況。100年の伝統の厚みを祝した新たなステップへ向けたスピーチが続いた。

登壇したマンデル教授はノーベル賞受賞者らしい厳格な雰囲気があったが、名誉博士学位贈呈式で、贈られたばかりの日本語の学位記をこちらに見せようとして上下逆さに持ってしまったりと、巧まざるユーモアと愛嬌のある仕草に会場がわいた。

優勝者は、村上さんで4人目となる。「勝つ自信はありました。でも勝ったときは、やった！ というよりもホッと安心する気持ちになりましたね」



ことを念頭に置かないようにしています。直前にテレビも来るって言われたときも、動じてる暇はなかったですし」

むしろ余裕である。とりわけこの大会では、勝ちたという思いが強かった。

「大会の前日、母が手術をしました。命に関わるものではなかったけれど、自分が勝つことで母を励ましたかった」

また1年生。連覇や史上2人目となる4連覇への期待もかかる。そう水を向けると、

「来年も、ぜひ連覇で

次に目指すのは、12月の学生王座戦。上位になれば、世界学生王座戦へ進む。

「プレッシャーに負けたくない。本因坊での経験

きるようがんばりたい。できれば4連覇もしていきたい」

と声が弾んだ。

落ち着いた雰囲気の上で、さんだが、囲碁を離れると普通の学生である。最近「お笑い」が好きで、「よくわからないけど、なんか笑えるもの」がお気に入り。特に、さまざまの大竹やアンガールズが好きだという。本人も、「ふかしいも」というあだ名で呼ばれることもあるそう。

ミクロ・マクロ経済の勉強も「楽しい」というから、充実の日々。



いま、日本の女子マラソンが強い。その女子マラソンの先駆けである増田明美

さんの講演会「夢を走り続ける女たち」が、10月26日、多摩キャンパス8号館で開かれた。この講演会は、女性白門会（会長・北村敬子 商学部教授）が主催する女子学生の就職支援イベントの一環で、ことしで11回目を数える。

爽やかなパント姿で登壇した増田さんは、「中央大学に来るのは

2回目なんです。実は18歳のころに、公式記録会でお邪魔したんです」と、当時の印象を語る。「そのときはまだ高校生でしたが、日本新記録を中大のトラックで出したことを、今でも鮮明に覚えています」

名門成田高校在学中は、長距離種目で次々と日本記録を樹立。82年にマラソンで日本最高記録をつくり、その後92年の引退までに残した記録は、日本最高記録12回、世界最高記録2回更新と、かつての日本女子マラソン界をリードした小さなトップ・ランナーだった。

講演会は、そんな快走人生が終わった引退後の話から始まった。

「引退してから、私は縁あつてマスメディアの仕事を始めました。あるラジオ番組の枠をいただきパーソナリティーをつとめたときも、いままでの自分のイメージを変えようと必死に

「栄光より失敗に学んだ」 増田明美さんが 女性白門会イベントで講演

を胸にがんばります。あと、揺るぎない自信を見た。語学の勉強もしなくちゃ」

（学生記者 津江瞳 文学部3年）



「体当たり子直し」で知られる伊藤幸弘さんの講演

会（平和哲学研究所主催）が白門祭初日の11月3日、

「体当たり子直し」伊藤幸弘さんが多摩で講演 「危篤の父と、出所を出迎えた社長に救われた」

がんばったんですが、周りから距離を置かれているの気がついた。私がんばらなきゃと思うことで、出しゃばって空回りしていたんですね」

あったのかも知れません。そのときに、周りとの調和やムードの大切さを知ったんです。このことはみなさんが会社組織に入り、働いてもそうですよね」

自らの失敗談をもとに無理なく具体的なアドバイスにつなげていく。走る選手

をけなさず、エールを送り続けるマラソン解説そのままの語りうまさである。後半では、都はるみの「そっくりさんポーズ」や女子マラソンの選手、監督の隠れたエピソードも披露し、会場をわかせた。

（学生記者 滝沢孝祐）

多摩キャンパスで行われた。伊藤さんは、かつて1万5000人の暴走族「相州連合」の2代目総長だったが、いまは「非行カウンセラー」として活躍、最近では衆院特別委員会にも参考人として出席した。

伊藤さん自身、数々の愛情ある人たちとの出会いによって更生してきた。20代で逮捕される。「もう人生終わりだと思いませんね」

「自分を認めてくれない父親への不満が自分の非行の原因。でも危篤の父の前で、初めて父の愛情を知りました。自分がムシヨにいる間、父は、町中にあった自分への嫌がらせの落書きを深夜一人でせつせと消していたのです」



トロフィーを手に入賞の高校生。後列左・久保崎さん

10・29「第5回高校生地球環境論文賞」表彰式 最優秀賞は広島工業大高・久保崎勝也さん

中央大学が主催する「第5回高校生地球環境論文賞」の表彰式が10月29日、多摩キャンパスで行われた。ことしは、近畿・中国・四国地区を中心に196点

の応募があり、最優秀賞には、広島県の観光地、宮島のシカが観光客の不用意なエサやりから死ぬなどの事故を通して、人と動物の共生のマナーを問いかける広島工業大学高校3年、久保崎勝也さんの「内からしか見えないもの」が選ばれた。

式には、久保崎さんのほか優秀賞（3点）、佳作（6点）の入賞者らが出席し、武田直邦商学部教授（学長代理）から、表彰状と副賞としてトロフィー、賞金が贈られた。

審査委員長の田中廣滋経済学部教授は、環境問題に対する中央大学の取り組みの一端として地域と連携した「中大・八王子方式」による地域活性化支援などを紹介したあと、応募論

文について「調査データをもとにした好論文が多く、全体的にレベルが高くなっている」と講評した。入賞者は次の通り（敬称略）。

- 【最優秀賞】（賞金10万円）久保崎勝也【優秀賞】（賞金5万円）沼津商業高3年、後藤匡「愛知万博に見る環境問題」▽出雲商業高3年、野井ちなつ「有機スズによる貝の生殖異常」▽西湘高2年、山本陽「大気中のNO₂とその特性について」【佳作】（2万円）帝京高3年、何一帆▽星野高3年、北澤桃子▽横浜隼人高2年、小林麻衣▽同高3年、佐藤英絵▽高知南高3年、鈴木友貴▽立命館慶祥高2年、村田郁【学校賞】（教育奨励金5万円）島根県立出雲商業高校▽滋賀県立国際情報高校▽福島県立福島高校

式あとの懇談会には、田中、武田両ゼミの学生ら

もかけつけ、制服姿の入賞高校生と談笑する光景も見られた。

最優秀賞の久保崎さんは、「宮島には小さいころよく行っていて、自然が守られているところだと感じていた。それがいままんだかおもしろい、というテーマで書きました。第一志望は中央大学商学部で会計士をめざしたい」と意欲十分。また北澤さん（佳作「私を育てた有機農業」）は「高校生活の思い出作りに何かをやりたくて、規定の4000字はきつかったけど挑戦しました。入賞できてうれし」と笑顔で語った。
 （学生記者 猪瀬智巳 商学部3年）

